

モンゴル考古学プロジェクト 2025（令和7）年度における研究成果のあらまし

いまから約 800 年前のこと、東北アジアの片隅にいた遊牧民の集団にチンギス・カンというリーダーが出現しました。チンギス・カンは、ユーラシア大陸の東西にまたがるモンゴル帝国（1206-1388 年）という巨大な国家を造りあげました。

モンゴル帝国には、破壊と殺戮という負のイメージが強いですが、信教の自由などで民族の融和に努め、交通網を整備して通商を発展させたというプラス面もありました。東西世界の結びつきを強めたことで、大航海時代の序章、あるいはグローバル化の先駆けと評する研究者もいます。宗教や民族間の対立が深刻化している現在、いかにして持続可能な世界を創り出すことができるか。モンゴル帝国の歴史から学べることは、少なくないと思います。

ただ、モンゴルの遊牧民は、自分たちのことを文字に残しませんでした。反対に、食物の残滓や住居跡といった「モノ」は数多く残しました。私たちは、そうした「モノ」を通して、モンゴル帝国の実態に迫ろうとしています。それが「モンゴル考古学プロジェクト」です。

モンゴル考古学プロジェクトでは、モンゴル科学アカデミー考古学研究所と協定を結び発掘調査をおこなっています。2025 年度は、チンギス・カンの先祖の墓地である可能性の高いエレーン・トルゴイ遺跡と、チンギス・カンの拠点「ヘルレン川の大オルド（宮廷）」跡のアウラガ遺跡で調査をおこないました。

エレーン・トルゴイ遺跡では 2 基の墓を発掘し、全部で 4 体分の人骨を検出しました。年代は 11 世紀中頃でした。金銀製の副葬品と伴う人物と、簡素な副葬品の人物がいて、後者は前者に殉じたことがわかりました。当時の社会にエリート層が形成されていたことがわかりました。現在ヒトゲノム解析も進めていて、当時の社会のようすをより具体的に明らかにするはずです。

アウラガ遺跡では、庶民の住居跡を 1 棟検出できました。簡素な掘立柱住居で、カマドや床下暖房施設がみつかりました。鉄鍛冶関連の遺物が多数出土しているため、居住者は鉄工に携わる技術者であったと考えられます。

2027 年にはチンギス・カン没後 800 周年を迎えます。2026（令和 8）年度も本プロジェクトでは、発掘などモンゴルでのフィールドワークを中心にして、引き続き謎の多いチンギス・カンの実像に迫りたいと考えています。

2025 年度の調査は、日本学術振興会科学研究費（基盤 A、代表：白石典之）およびアジア連携研究センターの研究経費によって実施されました。



エレーン・トルゴイ遺跡の発掘



アウラガ遺跡の発掘